

福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 (財)第五福竜丸平和協会
〒136 東京都江東区
夢の島3-2
都立第五福竜丸展示館内
電話 03-3521-8494

わたしは、自然破壊・貧困・人権抑
圧・戦争等の全世界の問題を解決する
ために、どんな教育が求められており
日本の教育の課題は何かを研究してい
る。
そのために、とくに注目しているの
が、国連・ユネスコ・ユニセフの資料
である。
そのなかでも、とくにわたしを感動
させたのが、一九七八年の第一回国連
軍縮特別総会の最終文書であった。こ
の特別総会で、世界の加盟国は、歴史
上はじめて、軍備強化による戦争の抑
止(抑止論)はあやまりであり、軍縮
以外に、平和への道がないことで一一致
し、最終文書をまとめた。
第一八項にはこういわれている。
世界戦争―核戦争―の脅威をとり
除くことが、今日のもっとも緊急を
要する課題である。人類は選択を迫
られている。すなわち、われわれは
軍備競争を停止し、軍縮に向かうか、
それとも全滅に直面するかである。
この時、日本からは園田外相が出席
した。外相は、「誇り高き憲法」とし
て、日本国憲法の第九条を紹介し、核
兵器廃絶と、核実験の包括的禁止と、

国連・ユネスコの要請にこたえて

藤田 秀雄

八月六日を軍縮の日とするを提案
した。
八月六日を軍縮の日とする提案は、
アメリカ等の反対で、結局一〇月二四
日(国連創立の日)にはじまる一週間
を軍縮週間とすることになった。また、
残念なこと、これ以後も日本は、防
衛費を毎年着実にふやしている。
軍縮とは、単なる軍備削減のこと
ではない。その定義は、一九八〇年のユ
ネスコ主催軍縮教育世界会議最終文書
A2項に明示されているが、「全般的
完全軍縮をめざす一切の行動形態」で
あり、現在の武装民族国家システムを
「非武装平和の新世界秩序へ変えるこ
とをめざす過程」である。
では、軍縮―とくに核廃絶―をどう
すすめるか。特別総会最終文書では、
その「行動計画」にまとめられている。
そこで強調されているのは、軍縮教育
・平和学習の発展である。
つまり、軍縮を具体化するためには、
軍縮を支持する世界の世論をつくりあ
げ、ひとびとが、その世論を何らかの
行動で示す以外に道はないと考えられ
ている。このために、国連、NGO、
各国政府が、軍縮のための情報を普及

するとともに、あらゆる水準の教育―
幼稚園から大学、社会教育まで―で、
平和・軍縮教育をすすめることを求め
ている。最終文書第一〇六項には、つ
ぎのように書かれている。
軍備競争によってつくりだされた
問題および軍縮の必要についての理
解と自覚を高めることをめざして、
各国政府ならびに国際政府組織、国
際非政府組織にたいし、あらゆる水
準での軍縮教育と平和学習の計画を
発展させる措置をとることを要請する。
つぎの第一〇七項では、加盟国が、
自国の教育機関のカリキュラムに、平
和・軍縮教育の教材を取り入れること
を奨励するため、できる限りの措置を
とるべきであるとしている。
こういう世界の動きのなかで、ユネ
スコは、二年后に、軍縮教育世界会議
を開催し、「軍縮教育の一〇原則」と
いわれるものをまとめた。
その後、米ソの冷戦構造は終結した
とはいえ、なお、平和・軍縮の課題が
重要であることに変わりはない。
第五福竜丸展示館は、広島・長崎の
原爆資料館とともに、国連・ユネスコ
が強く求めている平和・軍縮教育の施
設として、貴重である。ひとりでも多
くの子ども、おとなが展示館を訪れて
ほしい。また、日本に来る外国人にも
宣伝してほしい。
(立正大学教授・協会評議員)

展示館開設十五周年を祝う―東京で記念祝賀会

六月十一日、東京の日比谷公園
・松本楼で第五福竜丸展示館開設
十五周年記念祝賀会がひらかれま
した。中学校の修学旅行の見学を
はじめ、小中高校生の来館がひと
きわ多くなり、展示館の果たす社
会的な役割が一層増大するなかで
迎えた十五周年にふさわしく、協
会関係者、学者、ジャーナリスト、
青年、婦人、平和・原水爆禁止運
動の代表者、また、夢の島熱帯植
物館の館長など各方面から約六〇
名が出席しました。東京都知事、
広島・長崎両市長からもメッセージ
が寄せられました。
祝賀会は、冒頭、記念講演とし
て、山田英二元金沢大学教授が第

大石又七さんの手記出版

第五福竜丸乗組員大石又七さん
の手記『死の灰を背負って―私の
大石又七』

『死の灰を背負って』表紙

人生を変えた第五福竜丸が、七
月十日、新潮社より出版されまし
た(四六判・上製・一、三〇〇円)。
手記はビキニ水爆実験被災の生
々しい、貴重な証言だけではありません。
愛着をこめた海の男の半生記であ
り、ふるさとの少年時代の思い出
から、終戦、十四歳でカツオ船の
漁師になった苦勞、そしていま、
重いものを背負い続けながら社会

五福竜丸被災と当時の社会状況、
死の灰分析の苦勞、ビキニ事件の
歴史的な意義などについて約三十
分講演。出席者は改めて福竜丸保
存の重要性について認識を新たに
しました。
川崎昭一郎会長の挨拶のあと、
小川若雄理事の司会ではじめられ
た記念パーティは、石井あや子顧
問が「原水爆のない未来へ」と乾
杯の音頭をとり、あとは、いくつ
かの輪になって自由に懇談しまし
た。
三宅泰雄前会長はじめ協会と展
示館の発展のために力を尽くした
人々を偲びながら展示館の歩みを
語り合う輪、展示館の修理と拡充

について今後の展望を語り合う輪
俳句や音楽やベン・チャーソンと福
竜丸と文化について懇談する輪な
どなど。なかでも話題の中心にな
ったのは、こんど手記を出版する
ことになった第五福竜丸乗組員大
石又七さん。出版社の編集者、出
版に協力した人々もかけつけ、大
きな輪ができました。広島テレビ
の突然の撮影もあり、にぎやかな
祝賀会も恒例の本多喜美副会長の
閉会の辞で八時前に終了。展示館
の来館者は当日までにおよそ一五
二万名。再来年の協会設立二十周
年には二百万人をと、新しい航海
がまたはじまりました。

評議員会もひらく

祝賀会に先立って、同日、協会
に発言する大石さんの人生への真
摯な歩みが語られ胸を打ちます。
同じ船の仲間へのやさしい思い
やりと、亡くなっていく仲間への
深い愛惜をこめて、大石さんは多
忙で厳しい仕事の中で、数年がか
りで書き綴りました。第五福竜丸
乗組員のこのような手記ははじめ
て。若い人たちに語り伝えたい、
その願いがあふれています。(協
会で普及。送料とも一、五六〇円)。

の評議員会が同じ、松本楼でひら
かれ、十七名の評議員(委任状含
む)と理事・監事が出席、新年度
の予算・事業計画、前年度の決算
・事業報告の説明をうけて、協会
の活動について審議しました。

協会の評議員、顧問決まる

先の第一〇三回理事会で選出し、
就任のお願いをしていた協会の評
議員、顧問が左記のように決ま
りました(敬称略)。

- 評議員(二十名)
飯塚利弘、伊東 壮、内山尚三、
大石又七、落合 巖、小野 周、
小佐田哲男、柴田徳衛、庄野直美、
杉 重彦、関屋綾子、畑 敏雄、
藤田秀雄、藤原 弘、堀田てる子、
三井 周、森 一久、山川新二郎、
山口勇子、吉田嘉清。

顧問(五名)

- 秋月辰一郎、石井あや子、小笠
原英三郎、草野信男、森滝市郎。

山川新二郎評議員死去

協会評議員山川新二郎氏(元長
崎造船大学教授)が、六月十日、
胆のうガンのため逝去されました。
造船工学の立場から、長きにわた
り第五福竜丸の保存、修理に貢献
されました。

妹の被爆と第五福竜丸と

裏辻敦子

第五福竜丸が「夢の島」のゴミの中から見つかったというニュースに驚き悲しんだことがまだ昨日のことのような気がするのに、「展示館」が出来てからももう一五年にもなると聞いて、時の流れの早さに改めてびっくりしないではいられない。

私が原水爆禁止問題や放射能等に関心をもつようになったきっかけは、妹夫婦が広島で被爆したためである。空襲に明け暮れる東京を逃げ出して、夫の実家のある広島に転勤させてもらうことになったという知らせを妹から貰ったのは、一九四五年七月の末のことだった。その後何の音沙汰もないので心配していたところ、文字通り幽霊のようにヒソリとわが家の玄関に妹が立っていたのは、お盆も近づいた八月の十日頃だった。想像に絶する妹の被爆の話は、まことにこの世のこととは思われなかった。今こそ被爆者の語部や

写真、絵画などで、広島や長崎のあの時の有様を事実に近い形で描くことも出来るが、当時は「ピカドン」という言葉が被爆者の間から生れるくらい、原爆の話は政治的タブーとなっていた。生き残った人達の生活は悲惨をきわめていた。治療法も判らぬままに健康上の心配が大きいのしかかり、被爆の影響は孫子にまで及んで久しいと囁かれれば、心細さや苛立ちは隠すべくもなかった。一方自主的な意志からではなかったとしても直接戦争に参加した旧軍人達へは機会ある毎に恩給その他の形で保障が加えられてゆく不公平さに対する怒りは私の行動を否応なく反核、反戦へと駆り立てていった。国際条約違反の核兵器使用に加えて、数多くの非戦闘員を死傷させ、その上無辜の被爆者を出したアメリカは、悔い改めることもなく、一九五四年三月一日、太平洋ビキニ環礁で水爆実験を行った。

アメリカの設定した危険水域から離れては焼津所属の第五福竜丸は、その実験によって生じた思いもかけない死の灰をかぶり、久保山愛吉さんをはじめ二三名の乗組員が原爆症におかされるといふ事件がおこった。その時この方面に出漁していた多くの漁船は福竜丸同様に放射能の影響を蒙り、せっかく獲ったマグロをはじめ多くの魚が危険物として廃棄せられた。マグロ好き、魚好きの上、毎日毎日食糧不足で苦しんでいた私達日本主婦にとって、この事件は政治的、学術的な難しいことを飛び越えて、多くの婦人たちに行動をおこさせるに充分な要素をもっていた。

怒りと恐怖をかきたてた。その結果、日本では早くも八月原水爆禁止署名運動全国協議会が結成され、年末には二十万をこす署名が集められ、原水爆禁止運動が世界を動かしはじめたのである。その後放射能の研究に気をとられていた私は、申訳ないことに生証人である第五福竜丸の保存のことは全く忘却していた。一九六八年四月、崩壊寸前の姿で夢の島で見つかったという報道を聞いて私は頭をガンと殴られたような気がした。

(福岡市在住)

平和を求めて(四)

私の行動の原点は ビキニ被災



齋藤 鶴子

ヘルシンキ大会におけるベトナム戦争解決の手段について、財団本部と支持者協議会との意見が異なり、したがって支持者協議会としては、ラッセル法廷(ベトナム戦犯国際法廷)の支持はむづかしい状態になった。

私は最初、シエンマン氏の過激



杉の子会読書会、1957年5月。前列中央が筆者

とも思われる行動に同調できない気が持った。しかし、ラッセル卿がかつてのナチスに対する宥和政策がナチスの侵略的欲望をつのらせたと考えて、アメリカのベトナム政策に激しい抵抗を示していることを、ファーレー理事の手紙、ラッセル卿のベトナムについて書かれた数々の論文、とくにラッセル法廷へのよびかけ「人類の良心へ」を読み、決して財団の目標から遊離したものではない、支持してゆかねばと思った。事務局を担当していた私は、会員の中には支持している人たちがもあり、有志で行動してゆけばよいと考えた。熱心にたくさんの署名を集めた高校生たちもいた。集まった署名と僅かなカンパ金を本部に送り、大会の成功を祈ると電報を打った。これに連携して行なわれた東京法廷には、草の実会の会員は私を含めて十四名参加し、機関誌『草の実』に報告を書いている。

(一) 名称、規約の改定、本部との関係を清算。(二) 会の存続を願う人がいる以上、同意できないものは離脱。(三) 解散を提案された。討論の末、少数意見である(三)の会の存続が認められたことは、不幸中の幸いで、会長、会員の方々に感謝している。この日の参加者の中で残ったものは僅かに六名、出版社の編集長、大学教授二名、評論家、大学院生(息子)と私だった。各々忙しい人たちが、その後はあまり行動はなかったが、会の発足以来続けていた、アインシュタインの原則と「ベトナムに平和を」

第五福竜丸の保存が決まり、第五福竜丸平和協会は、今年設立から十八年、展示館は開館十五周年を迎えた。展示館は、修理をこの三月終了し、装いを新たにし、日本を取り巻く内外共に厳しくなっている「核状況」の現在、「水爆の証人」として、まず、若者の眼にも知らせてゆく努力をしている。近年、小中学校、高校などからの見学がふえたことは大変うれしい。「核」による眼に見える被害と共に、年月を経ねばわからない放射能の危険を訴える大切な拠点として、私はできる協力をしてゆきたい。

(第五福竜丸平和協合理事)